東方行者放浪伝

大トロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方行者放浪伝

【Ｎコード】
Ｎ５０４７Ｚ

【作者名】
大トロ

【あらすじ】
旅をしていた青年が過去に跳ばされて、現代に向かうべく更に旅をする。
全国各地津々浦々、東奔西走七転八起。
お供を連れて今日も楽しく行脚と洒落込む。

俺と傘とオールドジャポン（前書き）

はじめまして、大トロです。
ゆるくまったり書いていこうと思ってます。
もう先達がかなりいらっしゃいますので、偶にネタ被りなどあるかもしれませんがどうぞ読んでやって下さい。

俺と傘とオールドジャポン

雨後の澄んだ空気のする峠を歩く。
昨日は夕方から盛大に降ってきたけど、バス停に無造作に捨てられてた古い和傘を拾っていてよかった。
濡れはしたがそれも許容できる範囲の内に、既に放置された廃寺を見つけて駆け込めたのだ。
乾かす為に一応室内で干しておいた上着は未だ少し湿っているけど、この天気なら歩いている内に乾くだろう。
凝り固まった背筋を伸ばして、旅の今までを振り返る。

些細な事がきっかけで親父と喧嘩して高校卒業と同時に家を飛び出した俺は、日雇いのバイトなどをしながら諸国漫遊の旅をしている最中だ。
母親には偶に電話で会話する、その度に戻ってこないのかと聞かれるがこの旅を通じて、俺は何かを掴めそうな気がしてたんだ。
それが見つかるまでは戻らないと告げると、溜息と共に呆れた声で無理はしないでと言われる。
今の状態が社会不適合者と言われてもしょうがないのは理解してるけど、その土地の人々との一期一会を楽しんだり、山や峠を踏破する度に自分が変わるのが解る。
俺は色んな事に手を出しては飽きたら止めるを繰り返してたから、この旅だけはやり遂げようと思ってる。
中途半端で終わるのはもう嫌なのだ。

にやにやしながら浸る俺って気持ち悪いな。
苦笑しながら自分を嘲ていると――――後ろから嫌な気配を感じる。
振り返ると一台の車が濡れた路面でスリップしてこちらに向かって突っ込んできていた。

信じられない、なぜ、俺が。
そんな事ばかり思い浮ぶ、実際直面すると体が動かなくなるのは嘘じゃなかったみたいだ。
後ろはガードレールしかなく、越えれば崖下へと真っ逆さま。
まず間違いなく助からない。

突然の事に呆然としてた俺を車は軽く跳ね飛ばした。
人事の様に思えるこの状況、まるで悪い夢。
少しの浮遊を楽しんだ後は落ちるしかない。
眼下に広がる森が地獄の様にも思えてくる。
もうすぐ目の前に近づく大地に、足掻きようも無く、俺は全てを諦めた。

「――さ―。旦――ん」

誰かの声が聞こえる、俺は死んだのでは無かったのか？
もしかして助かったのか？

「旦那さん！　いい加減起きて下さいな！」

「うおわあぁ！　なんだあ！？」

耳元で聞こえた大音量に朦朧としていた意識も浮上する。
思わず叫んだ俺に誰が文句を言えようか。
飛び上がって辺りを見回すように首を振る俺は、傍から見ればさぞ滑稽だろう。
ふと、視界の端に大きな紫色と小さく青色が写った。
恐る恐る視界を下の方に向ける。
そこには目と口が付き、舌をデロンと垂らした紫色の傘を差す、空色のゆるいウェーブのかかった髪とクリクリした青と赤の瞳が特徴的な美少女が、その目（ついでに傘についた目）でこちらを見つめていた。
つうか馬鹿でかい舌に舐められ、肌が粟立つ。

「は？　え？　なにこれ？」

「旦那さんってば死んだようにずっと寝てるから流石の私も必死になっちゃったよ。まぁ、旦那さんが驚いた分、お腹は満たされたけど」

意味が、わからない。
舐められた理由もわからない。
というかこんな髪の色ってありえるのか？
しかも赤目青目（オッドアイ）でかなり美少女――ってそうじゃない。

「俺……生きてる……？」

「なに？　旦那さんって幽霊だったの？」

「いやいやいや、足はちゃんとあるし心臓は動いてる。呼吸もしてる。死んでない」

矢継ぎ早に自分の体を確認しても、崖から落ちる前と変わりは無い。強いて違いを挙げるなら――。

「俺の傘がない……そして君は誰だ？　もしかしてその持ってる傘って……」

あの古ぼけたバス停で拾った傘がないのと、この元気のいい少女だろう。

俺を旦那さんと呼ぶ少女、自分の記憶を辿ってみれど覚えは無い。

こんな印象強い子を忘れるなんて、やろうとしてもできるもんじゃないだろうし。

ただ、俺が拾った傘の色と、この子が持ってる化け傘の色が同じだ。

「わちきは多々良小傘、旦那さんがバス停で拾った傘の付喪神よ！」

「付喪神？」

付喪神とはあの１００年経ったら物にも魂が宿るとか何とかの奴だったっけ？。

座敷童子なら地元で見たことがあるけど、付喪神なんてのは初めて見た。

いや、座敷童子を見たなんてのも今考えれば眉唾物なんだけど。

つうかやっぱり、この子が持ってるのは俺が拾った和傘か。

「大分昔に傘職人のお爺さんが貴族に作った傘なの。それが人の手に渡るにつれてこんな茄子色の傘なんて流行らないって、あのバス

停に捨てられたのさ……妖として生きるには現代は居心地が悪すぎて私が出ることはできなかったんだけど、旦那さんが拾ってくれたお陰で出てこれたから嬉しいよ！」

そう言いながら棒立ちする俺の腹に嬉しそうに抱きつく小傘。
悲しいことを元気に言う子だなぁ、それと妖怪の癖になんというポジティブシンキング。
俺に捨てられるとは思ってないのだろうか。
いや、和傘って好きだし、結構気に入ってるから捨てはしない。
ちょっと変わってるけど、こんな美少女が旅に付いてきてくれるんなら文句なんぞありはしない。

茄子色、つまり紫色っていうのはやっぱり奇抜な色という認識が現代人にはあるからねぇ。
昔は高貴な色として貴族様達が使った色として知られているんだけど、流行り廃りってのはどうしようもない。
俺個人としてはそんなにおかしくないと思うんだけど、これはやっぱり旅をしてたせいで流行に乗り遅れまくりということなんだろうか？

閑話休題（それはともかく）

「ふむ、今まで出てこられなかったのが何で急に出てこられるようになったんだ？」

ふと疑問に思ったことを小傘に尋ねる。
落ちた衝撃でなにかしらの能力でも発現したのか？

「んー、なんか妖気とか霊気とか、そういう気が濃いからじゃないかな。私の感覚だとこの気の濃さは現代じゃないっぽいし、まだ妖怪がそこらへん歩いてるから。つまり、まだ幻想になってないってことだよ！」

「ふーん……いやいやいや、現代じゃないってなんぞ！？」

余りにも普通に答える小傘に、思わず聞き流してしまいそうになった。

現代じゃないっぽく、『まだ』幻想になっていない。

つまり考えられるのは――――。

「過去にタイムスリップしたってことかよ……」

「そういうことだね！」

傘を差してゆらゆら俺の周りを楽しそうに浮かぶ小傘に少しイラっとした。

俺と傘とオールドジャポン（後書き）

章の元ネタはロマ〇ガ３の聖王廟にいるロアリングナイト先生の台詞、わかる人いるのかな。

つらい試練だが
受けるか

ニア　はい
　　いいえ
　　な、なにをするきさまらー！

俺と小傘先生の授業（前書き）

続けて投稿。

俺と小傘先生の授業

能天気な小傘に少しだけイラっとしつつも、小傘から情報引き出しつつ整理する。
まず『気』というモノについて。

「気っていうのは世界のどこにでもある力かなー。妖怪には『妖気』があるし、神様には『神気』。人間だと『霊気』とかね。それを使って弾を作ったり、神様なら奇跡を起こしたりね」

「漫画とかの『気』と大差ないってことか」

つまり気＝力ということらしい。
その力の大きさによってできる事が増えたりするし、そもそも力が小さいとそれらを感じることすら儘ならないらしい。
俺のいた世界でそういうのが少なかったのは現代人にとって必要の無いものになったからか、はたまた元々人間の力は小さいのか。
要は超常的な事を種も仕掛けもなくできるようになる不思議パワーってこったな。

「人間に力の大きいのはそんなにいない、かな。偶に鬼もびっくりする位強いのもいるけど」

「ほうほう……して、俺はどうなんだ？」

男の子として生まれたからには、一度はそういうモノに憧れを抱くだろう。
具体的には元気玉とか霊丸とか。
わくわくしながら小傘に尋ねてみる。

「私はそういう霊視とかできないからよくわからないんだけど……あんまりないかも？　だ、大丈夫！　もし襲われても私が旦那さんを守るから！」

当の小傘は居心地が悪そうしている。
まぁ、最初から期待しちゃいないが、目の前で言われるとそれはそれでがっかりしちゃう。
だって、男の子だもん。
つうか少女に守られる俺、情けなさすぎる。

気を取り直して、次は妖怪について。
俺が見た事がある妖怪っぽいものは座敷童子しかいない。
あの子が本物なのかすら怪しいところなんだが、それ以外は目の前にいる小傘だけ。
おそらくは元の時代に戻るのは無理だろうから、結局この魑魅魍魎溢れる倭国で暮らすしかないのだ。
未来に行く手段なんぞ思いつかないし、時代はわからんが昔の日本でデロリアンなんてあるわけがない。

「妖怪ってのはやっぱ危険なのか？」

「うーん、確かに大多数は人間の肉を好んで食べたりするけど。全部が全部そうとも言えないかなー。私には『人間を驚かす程度の能

力』があるんだけど、それを使って人間が驚いた時の感情を食事にしたりするし、他にもそういう妖怪がいるかもしれないから」

「そういえば、俺が起きてビビッて叫んだ後にお腹が膨れたとか言ってたな……ん？　その、『程度の能力』？　ってのは何なんだ？」

妖怪固有の能力とかそんなんだろうか？

というか人間を驚かすのに能力なんて必要なのか。

逆に考えると、その能力がないと人間を驚かすことなんてできないのか……。

ところどころで涙を誘う唐傘お化けだな、小傘よう。

「どこかでわちきが哀れまれた気がする……おほん。『〜〜程度の能力』っていうのは種族問わずに条件なく発現する能力のこと。霊力の扱いが上手なら『霊力を扱う程度の能力』とかね」

「なんだかよくわからんが、先天的に使えてたー、とか気が付いたら使えてるーとか、そういうことか？」

「うん、まぁそんな感じ」

なんともまぁ、さっきの『気』より謎が多いな。

不思議パワーの名称はむしろこっちの方が相応しい気がしてきた。

超常現象ここに極まれり。

俺にもそんな能力があるのかね？

「その程度の能力ってのはどうやって気づくんだ？　名称とかさ？」

「私の場合は驚かすことができないとお話にならないからなー、気が付いたら頭に浮かんでたって感じかな……能力を使っても現代の

人間は驚いてくれなかったけどね」

ボソッと最後の呟きが聞こえて、思わず心の汗が目から出そうになるぜ。

それはともかくとして、頭に思い浮かぶのか。

試しに座禅でも組んでみようか。

姿勢を正して、心を空に、唯只管に己の内へと潜っていく。

深く、深く、深く。

「これか！」

「うひゃい！？」

頭に能力名が思い浮かんで、少しばかりテンションがあがってしまったようだ。

俺の様子を不思議そうに見ていた小傘は、可愛らしい悲鳴をあげて涙目になっている。

なるほど、これが『萌気』か……。

と、馬鹿な事を考えてないで謝らなきゃな。

「すまん、悪気はなかったんだ。ちょっと俺にその能力ってやつがあるのか確かめたくてさ」

「う～、それはいいんだけど、驚かす私が逆に驚かされた事が少しショック」

「ま、まぁ、驚かす案については今度俺も一緒に考えてやるから。それで能力なんだけど――どうやら俺には『縛る程度の能力』があるみたいだ」

俺の能力の名称にぽかんと口を開ける小傘。
と同時に何故か顔が赤くなっていく。
何か深刻なことでもあったのだろうか。
思わず心配して小傘が口を開くのを待った。

「――――なんというさでずむ」

おい、ちょっと待て。

俺と小傘先生の授業（後書き）

さくさく年代ジャンプするし、モブ妖怪はルドン送りします。
大まかなプロット自体は作ってあるので、後は私の筆のノリ次第。

※デロリアン：有名な映画にでてくるタイムマシン。
膨大な電力と原子炉を搭載した自然環境に悪い車。

俺と小傘と神二柱（前書き）

ようやく主人公の名前が判明。
うーん、自分で想像する場面を文章にするのはやっぱり難しいです。

俺と小傘と神二柱

阿呆な事をぬかした小傘に拳骨を食らわせたあの日から早1週間。
川を見つけて魚を獲ったり、小傘に能力とか気について学びつつも順調に旅を進められた。
道中、餓鬼などの木っ端妖怪が襲い掛かってきたりもしたけど、小傘にフォローされつつ俺の縛る能力の実験台になってもらったりした結果、それなりに使い勝手のいい能力だということも判明した。

小傘自身にも相手になってもらい、彼女を縛り上げたりしたんだけども。
その時になぜか小傘の息が荒くなり、顔が上気していた。
思わず、生唾を飲み込み、罵倒していじめたくなったが自制。

話を戻すが……相手の体を見えない縄で縛りあげて動けなくすることができ、だが一番吃驚したのはこれは小傘との訓練でわかったのだけど、相手の能力を縛ることもできるということだ。
ゲームでいう縛りプレイ的な、そんな想像をしてもらえたらわかりやすい。
反論は受け付けない、できたものは仕方ないのだ。
気については保留状態になってる、というのも小傘が扱うのは妖力であって霊力ではない。
つまるところ彼女は霊力の扱い方がわからないので、俺に教えることもできないということだ。

以上が簡単な近況報告。
現在のさし当たっての問題は――。

「独創的な帽子の少女に捕らえられてるってことかな」

「旦那さ～ん、ちょっとまずいっぽいですよぅ」

小傘のへたれた涙声が牢屋扱いの小屋に響く。
そう、あれはようやく人里を見つけた時の話。

久しぶりの人の営みを見て思わず舞い上がった俺は目の前に見える建物に向かったんだ。
竪穴式住居が目立っていたのでおそらくは弥生時代だと思われる。
俺達が入ったのは大きな祭殿で、そこにはサラサラとした金髪の少女がいたから話しかけたんだよ。
すると、なんということでしょう。あれだけ自由に動いていた体がみるみる内に白い蛇のようなものに捕らえられ私たちは動けなくなりました。
少女の後ろにいきなり妙齢な紫髪の女性が現れ、こちらに聞こえないように二人で話しをした後、衛兵にとっ捕まり今に至ります。

一体何がどうしたというのだろうか。
俺達がなにかしたか？
無断であの建物に入ったのが悪かったのだろうか？
それとも小傘が妖怪なのがいけないのか？
疑問ばかりが頭を駆け巡る、最悪小傘だけでも逃がさなければならないかもしれない。
ふと、外から土を踏みしめる音が聞こえてきた。

その音は近づいてきて、この小屋の前で止まる。

「少し聞きたいことがある、それと念のために言っておくが私達に何かしようとしても無駄だということを覚えておけ」

扉の向こうから凛々しい声が響く、その迫力というか威圧感のある声に、知らず唾を飲み込んでいた。

流石の俺もこんな理不尽な扱いには腹を据えかねるけど、現状は抗ったところでたかが知れている。

俺たちを捕らえたあの白蛇、見た目はただの蛇だが実際に触れられた俺にはとてつもなく恐ろしいモノにしか感じられなかった。

小傘も同様で、小屋にいれられてから二人とも暫く顔が青ざめていたのだから。

「「わかりました」」

「うむ」

小傘と声が重なり、相手からも威厳のある返事がくる。

するとガタガタと何かを動かすような音がする、おそらくはつっかえ棒でも外しているのだろう。

ガラッという音と共に扉が開くと、捕まえられた時の少女と女性が立っていた。

なんというか後光がさしているような、思わずひれ伏したくなるようなそんなオーラを感じる。

そんな状態で胡坐を掻くというのも居心地が悪く、正座に座りなおしてしまう。

隣を見ると小傘も正座して背筋がピンっと立っていた、普段からそうしていれば印象も変わるのだろうけど、それは小傘っぽくない気もするので口にはださない。

俺達を見ると相手方も床に座り、本格的に話をする態勢を整えた。
「まず、自己紹介からだ。私は八坂神奈子という。『一応』、この神社に奉られている神の一柱だ」
八坂神奈子と名乗った女性は、こちらを見据えながら自らを神と称した。
神様、まさか本当にいるとは思わなかったけど、こうして目の前にすると素直に納得してしまう。
なるほど、このオーラが神力というものなのか。
神奈子に続いて金髪の少女も同じ様に口を開く。
「私は洩矢諏訪子。私もこの神社の神様だね、人間にはミシャグジの方が通りがいいかも」
ミシャグジ……諏訪信仰などで有名なミシャグジ様だろうか。
洩矢ということはミシャグジ様を統括する洩矢神ご本人様でいらっしゃると。
冷静に考えているように見えるかもしれないが、内心ではこんな金髪少女が！？　とかさっきの白蛇ってミシャグジ様か！？　八坂ってことは八坂刀売神（やさかとめのみこと）なの！？　とか結構焦っている。
つうか洩矢神と八坂刀売神がいる神社って事はここは諏訪大社か？
いや、諏訪大社の歴史は古いけど、弥生まで遡りはしなかったはず、ならその原型とでも言うべきか。
そういえば確かに過去に戻る前のあそこは長野だったっけか。
「さて、次はお前らだ。特に、そこの妖怪については色々と聞きたいことがある」
「ひぅっ！？」

神奈子の眼光に晒された小傘のダムはもう決壊寸前だ。
とりあえず一応、小傘の持ち主である俺がどうにかしなければならないか。

「私の名は葛城（くずき）貴広（たかひろ）と申します。彼女は私の傘についた付喪神、名は多々良小傘でございます。決して人間を食ったりする悪しき妖ではございませんので、どうか見逃して下さいませ」

馬鹿丁寧な口調で小傘を庇い平伏する俺。
へぇ、っというなにやら面白いものを見つけたような声色で諏訪子から声が上がる。

ここで引き下がったら小傘が調伏されるどころか、神様相手じゃ消滅してしまうかもしれない。
１週間ずっと小傘と共にいたのだ、全部とは言わないが彼女の性質はそれなりに理解している。
性格は素直で健気、人を驚かす悪戯が好きだけど、一度思い込んだら猪突猛進にそちらに向かっていく実直さ。
正直俺もこれが妖怪というものなのかと最初は思ったが、旅の最中に襲ってきた餓鬼は理性のない目で迷い無く俺を殺しにかかったのを見て、小傘が特別なのだと理解した。
人間とほとんど変わりない、むしろ下手な人間よりも人間らしい小傘を、見捨てることなどできるはずもなかった。

痛い程の静寂が続く。
１分か、１０分か、はたまた１時間か。
俺には永遠にも感じられる間、ずっと土下座態勢を崩さずにいた。
と、先ほど声を挙げた諏訪子がクスクスと笑い出す。

「葛城って言ったね、アンタなんか勘違いしてるけど私たちは別にその妖怪を殺そうとか思っちゃいないよ。頭上げなって」

その言葉に、下げていた頭を上げて諏訪子を見ると、目を丸くする俺を楽しそうな顔して見ている。

俺にとっては拷問の様なひと時が、彼女にとってはとても楽しいひと時だったらしい。

「はぁ……諏訪子、意地悪いよアンタ。私たちはその子が何を依り代にした付喪神なのかわからないからそれらについて聞いておこうと思ったのと、葛城の服と持ち物が気になっただけさ。まず、傘だっけ？　それは一体なんなんだい？」

神奈子が嘆息して俺達に尋ねてくる。

そうか、この時代の日本に傘は伝わってなかったのか、傘が当たり前だった現代人の俺には到底思いつかない疑問だった。

それにしても、なんと言えばいいのか。

知識だけなら色々と旅した時に聞いた雑学のおかげで説明できるけれども。

……ここは正直に話しておくか、俺達の境遇についてを。

神様相手に嘘なんて恐れ多くて俺にはできそうもないし、とかへたれ思考を展開しながら再度姿勢を正して俺は口を開こうとした――――。

「……旦那さん、わちき足痺れちゃった」
情けない声で俺の台詞を遮る小傘。
神様の前で粗相する小傘を、俺のできる全力を使って能力で縛り上げる。
俺達のコントのようなやりとりを見た神様は、シリアスな状況の中でそんな事をのたまう小傘の豪胆さにか、それとも俺達の滑稽さにか、わっはっはと豪快に笑い飛ばしていた。
なんとも締まらないなぁ、あと小傘、縛られて顔を赤らめるんじゃない。

「なるほどねぇ……私には俄かに信じがたいものだが」
「私は信じるよ、そっちのが面白いし。この飴っていう食い物も甘くて美味い」

一通り話し終えた神様達の反応は両極端だった。
どこか思索に耽る神奈子、俺が貢物として渡した飴をガリガリ齧る暢気な諏訪子。
足が痺れた小傘は見えない縄で縛られながら足を崩している、俗に言う女の子座りってやつ。
上気した顔と生足が妙にエロチックである。
狙ってやってないか？　この子。
とりあえず諏訪子に飴の正しい食べ方を教えよう、ガリゴリガリゴリという音が少しうるさい。

「洩矢様、飴は齧ると無くなるのが早いので舌で転がすように舐めたほうがよろしいかと」

「ん、なるほど。いやあ、未来の人間ってのは面白いことを考えるもんだねぇ。あ、他に何かこういう食べ物ってないの？」

ご機嫌な諏訪子は更にお菓子を催促してくるので、俺は返してもらった荷物の中から某十円の棒菓子めんたい味を渡してみる。
さて、この時代の、しかも神様にめんたい味は通用するのだろうか。
包装を開けるのに四苦八苦する諏訪子は、普通の可愛らしい少女にしか見えない。
俺が開け方を教えて、早速某うめぇ棒を食べる。
神奈子は諏訪子がポイっと捨てた包装を手に取って、更に思索に耽っている。

「おお……？　不思議な味だ、酒に合いそうだね」

「気に入っていただけたなら何よりです。ところで八坂様、何かございましたか？」

小さい口でもしゃもしゃ食べる諏訪子はとりあえず置いとくことにして、さっきから疑問符を浮かべる神奈子に話しかけることにする。今の俺達にとって相互理解は最重要と言っていい。
この時代に頼れるものなど何も無いし、このまま旅をして強力な妖怪に出会ったら何もできずに殺されてしまうかもしれないのだ。できればこの国に暫く逗留したいのだけど。

「いや、大丈夫だ。葛城の話に矛盾はないし、お前が嘘を吐いている訳でもないしな。それで、これからお前達はどうするんだ？」

来た、これが一番重要だ。

「できれば、暫くの宿をお願いしたいのです。私には防衛する力が殆どありませんし、小傘にずっと負担をかけるのも男としては少しばかり口惜しくもあります。私の能力も発現したばかりなので1、2年程修行をしたいのでございます」

「いいんじゃない？　ついでに国の建て直しとか手伝ってもらえば対価としては十分でしょ、役に立つ能力持ちって貴重だし。偶にでいいんなら修行は私が見てあげるよ」

ふむ、と顎に手を当てて考える神奈子と、あっけらかんと言い放つ諏訪子。
どこまでも対極だな、この二人は。
神様に教えを受けられるのは俺にとってかなり都合が良いから嬉しいものだ。
それにしても役に立つってことはやっぱり小傘の能力は……可哀想だから能力の縄を外してあげよう……・。

「ま、表向き取り仕切るのは諏訪子だし。こいつが良いって言って

るなら私が反対する意味もない。好きなだけいるがいいさ」

「はぅ……だ、旦那さぁん」

神奈子からも了承を得られたので心の中でガッツポーズ。
そして小傘は蕩けてる。
ドMってこういう子の事を言うのだろうなとか思ってしまう。
どうやら緊張に緊張を重ねた俺の精神は少しばかりおかしくなっているらしい。

「ありがとうございます。私達にできることがあるなら何でも申しつけ下さいませ」

俺の感謝の言葉と礼で、俺の短い人生で一番疲れる会話を終えるのであった。

俺と小傘と神二柱（後書き）

時代背景としては弥生の終わり、諏訪大戦が終わった後です。
捏造妄想独自設定どんとこいって感じですね、不快に思われた方は申し訳ありません。

※なんということでしょう：某リフォーム番組の名言。最近だとマインクラフトのシューっと鳴く？匠の方がわかりやすいかも。

※うめぇ棒：個人的にはたこやき味が好きなんですが、子供の時の駄菓子と言えばめんたい・チーズ・サラダでした。

俺と諏訪子と修行（前書き）

ネタを仕込むのって難しいです。
コメディ系を書ける人を尊敬する今日この頃。

俺と諏訪子と修行

俺と小傘は、諏訪王国に受け入れられてから忙しくも充実した日々を送っていた。
小傘は白と青の巫女服――なぜか脇が丸見えだった――を身に纏って、元々いた巫女達に仕事を教えてもらいながら忙しなく動き回っている。
元々何事にも一生懸命で素直な性格が良かったのか、里の人達には好意的に受け入れられて本人も満足そうだ。

俺はというと、どうやら彼の諏訪大戦の名残か、倒壊した建物の撤去や元々はそこまで大きくない湖だった諏訪湖が二柱の戦いの影響で馬鹿でかくなってしまったので堤防もどきを作ったりした。
もちろん自給自足が基本の時代なので、毎日の畑仕事もしっかりやったよ。
住居は新しく建て直す人達に混じって俺と小傘の家も建て、そこで日々を過ごしている。

そこまでは良い、満足できる生活だ。
家もあるし、食べ物もある。
小傘と言うちょっとMっ気はあるけど、可愛らしい少女との同棲もしてる……特に浮ついた話はないけどね。
問題はというと。

「ほらほら！　しっかり避けないと怪我するよーー！」

「ちょ！　ま、待って！　死ぬぅうううう！　うほあ！　今、掠った！　掠ったって！」

修行である。

他人から見たらただのいじめの様にも見えるだろうが、修行である。色とりどりで花火のような美しさを惜しみなく晒す霊弾を、避ける。唯只管に避ける、むしろ避けなければ死んでしまう。思わず素がでるのも仕方ないというもの。

事の始まりは修行と称された瞑想を1年ほど続けたある日のことだ。いつも通り、諏訪大社の一室で心を空にして座禅を組み、俺という個人を外界から遮断する。

俺にとっては1時間程度かと思っているこの瞑想、実は軽く6時間を越えているのだ。

人間が本当に集中できるのは３０分から５０分が平均らしいが、俺は子供の頃から呆っとしているといつの間にか日が暮れていたりした事が多々あった。

一度その状態になると、周りから音が消えるので話しかけられても答えないと、母には苦笑いで答えられたのを覚えてる。

で、こんな事を1年も続けていると、師である諏訪子に呆れられたものだ。

「貴広さぁ、あんた本当に人間かい？　あんだけの集中、神だって中々できるものじゃないよ」

そんな事を言われても体質なのでしょうがない。

困ったことはないし、治しようもないのだ。

「ま、お陰で思ったより早く次の段階に進めるよ。次は霊力の扱い

についてだけど、どうやらそれもしなくていいみたいだね」

「ええ、座禅してたらいつの間にやら扱えるようになってたんで…
…」

そういうことだ。
いつもの様に心を空にしてると、ふと身の内に暖かなモノを感じるようになった。
どうやらそれが霊力というものらしく、日常生活でもその感触を意識して引き出していたらいつの間にやらといった感じ。
本来なら5年は瞑想を続けて、やっと霊力を感じられるようになるらしい。
修行僧の皆様ごめんなさい。

「ま、偶にいるんだよねぇ、あんたみたいな才能のヤツ。あーうー、せっかく手取り足取り教えてやろうと思ったのに」

手長足長の間違いじゃないだろうな。
恐々とする俺にたいしてカラカラと笑いながら、ついてこいと言う諏訪子。
嫌な予感を感じた俺に対して灰色の脳味噌が警鐘を鳴らしていたが、神様に抗えるはずもなく体は諏訪子の後を追った。
裏山の開けたところで、簡単な結界を張る諏訪子は満面の笑みで俺に対して告げる。

「んじゃ、今から私が霊弾を撃つから貴広は『なんでも使っていい』から避けるんだよ。あ、あと当たったらちょ～っと痛いかもね～」

そして始まる、弾幕祭り。
諏訪子を中心にして放たれる、赤・青・黄ｅｔｃ。

色とりどりのの丸い弾、ポイフルっぽい弾、それなりに大きい俺の身長並みの大弾。
うおー！　とか、ぎゃー！　と叫びながら必死こいて逃げ続け、そして冒頭に場面は戻る。

「うん、まぁ筋はいいかな。無意識みたいだけど霊力で身体能力上げて、能力もちゃんと使ってたし。いやぁ、やっぱり人間は危機に陥ると馬鹿力を出すね、ほんと面白いわ」

「や、やっと、終わった、のか？　と、いう、か、こっちは、面白く、ない、ですよ」

畑仕事で体力がついたつもりだったが、どうやらこのちみっ子神様には足りないらしい。
ふらつく体を地面に投げ出して仰向けに倒れる俺を見る諏訪子はやはり笑顔、このドＳめ。
ふーっと息を整えていると、諏訪子が口を開く。

「いや、良いね。ここまで才能あるのは珍しい、人間だとウチの子位のものだと思ってたよ。厳密にはあの子も人間ではないんだけど」

諏訪子の言う『ウチの子』とは、洩矢と八坂の秘蔵っ子である風祝の女の子の事だろう。
現人神（あらひとがみ）――アラジン神ではない――、現人神とは人の姿をした神様で、彼女は巷でそんな感じで呼ばれている。

もっと正確に言うのならば、風祝の子は諏訪子の血を与えた人間の子であり、半人半神のようなものだ。
そんな現人神に匹敵すると、かの有名な洩矢神相手に言わせられるのなら、俺の潜在能力とやらも捨てたものではない。
それどころか、聞いた感じだと人間としては破格のようだ。

「今日はここで終わりにするけど、明日からも続けるからね。自分の仕事が終わったら拝殿までおいで。戦後処理も終わったから暇になってきたし、最近は神奈子も表にでるようになったしね」

蛙の様な姿勢でケラケラと笑う諏訪子。
これだけ見れば無邪気な女の子なのだが、言っていることはまるで鬼である、いや神なのだが。
それでも自分で頼んだことなのだ、やり遂げなければならないという気持ちが疲労と恐怖に勝る。
ふぁい、と情けない声で返事をする俺を尻目に諏訪子が山道を戻っていく。
が、ふと足を止めて振り返り、神妙な面持ちで口を開いた。

「貴広さ、あんた最近腹持ちが異常に良いとか、自分の中で霊力とは別の力を感じるとか、そんなことってあったりするかい？」

「は？　……そういえば、朝に飯を食べると昼と夜になってもそんなに腹は空きませんね。別の力についてはよくわからないです」

諏訪子の言葉に戸惑う。
確かに、半年ほど前から妙に腹持ちが良くなった。
燃費がいいとでも言えばいいのか、もうすでに日暮れだが今日も朝に小傘は美味そうに魚と麦を食べ、俺は裏山で採ってきた木の実や

果物を食べてから何も口にしていない。
普段は小傘もいる手前、一緒に食事をしているけど一人だと抜かすことも儘ある。
少し気になりはするが、個人的には特に問題も起きていないので放置していたのだ。

「――なるほどねぇ。そっかそっか、フフ」

俺の言葉を聞くと、諏訪子は面白いものを見た顔をする。
諏訪子は俺をこのような顔で見ることが多い。
嫌な気はしないけれど何を考えてるかわからないから、戦々恐々としながら諏訪子の様子を窺う俺の身にもなってほしいものだ。
まぁ、人間如きが神様の思考をわかる筈もないので、クッと不気味に笑う諏訪子の次の言葉を待つ。

「いや、いいさ……『まだ』決まったわけじゃないからね。そうだとしても害はない。はい！　今日はおしまい、小傘も待ってるだろうし帰っていいよ」

なんとも煮え切らない返答である。
彼女はこういった何かを臭わせる言い方も多い。
以前までは何事かと尋ねたりもしたけど、結局口を割らせることなどできるはずもなく。
まぁ、彼女が害はないと言っているのだから俺はそれを信じるしかない、流されてるなぁ俺。

「よくわかりませんけど、回復してきたので私も一緒に帰りますよ」

うん！　と可愛い仕草で頷く諏訪子はその筋の人達には堪らないだろうなぁ。

諏訪子は、なんというか公私の分別が凄まじくしっかりしていて、民や巫女達の前ではまるで王の様な威厳をもって接している。
俺と小傘は出会いが出会いだったし、境遇が色々と特殊なので「素の自分が出せて楽だよぉ」と言っているのを覚えている。

これからは戦に勝った神奈子が主体の体制を整えて、諏訪子は人前にでることが格段に少なくなるとか。
いきなりの主神の交代は民達にも不安を与え、下手をすれば神力の源である信仰を失くすかもしれないから慎重に慎重を重ねて体制を変えていくらしい。
政治的なお話は根無し草のような生活をしていた俺にはさっぱり要領を得ないので、その時は曖昧な返事を返すしかなかったけど。
ふんふん、と鼻歌を鳴らす諏訪子と彼女の頭にのっかる目のついた麦藁帽子の様なナニカを見ながら歩く俺達を見るのは沈み行く橙色に輝く太陽だけだった。

「ただいま」

「あ、おかえりなさい、旦那さん」

拝殿の前で諏訪子と別れ、俺は里のはずれにある自宅へと帰ってきた。
帰ってきたことを告げると、台所から小傘の声が返ってくる。
旅中はこんなやり取りはしてなかったから、家ができた1年前は凄く新鮮に感じて、ふと家族の事を思い出し涙ぐんだものだ。
ぼんやりと回想していると、トントンと軽い足音が響き気がついた

ら目の前に小傘が立っていた。

「って、そのエプロンどうしたんだ？　俺のエプロンとは色が違うみたいだけど」

「えへへ、裁縫上手な里のお婆さんに旦那さんのエプロン見せてこんなの作れますか？　って頼んだら作ってくれたんだ。似合う？」

いつもの青い衣装の上から、レース（なんでこの時代にあるのかはわからない）を使った白いエプロンを身に纏った小傘。
ちなみに俺のは黒いシンプルなエプロン、つうかすごいなそのお婆さん。
くるくるとエプロンをはためかせて回る小傘はご機嫌な様子。

「ああ、似合ってる。可愛いと思うよ……ん、何か焦げ臭くないか？」

俺のくさい台詞に嬉しそうにしていた小傘だが、最後の言葉にビシリっと固まった。
こいつもしかして鍋を火にかけたままだってのか！？

「あああああ、まずいまずい。せっかく貰った猪が焦げちゃうううううぅぅ」

動き出した小傘を見て微笑ましい気持ちもあるが、再三に渡って厳命してきた火の扱いについて忘れるなど言語道断である。
靴を脱いで、台所へと向かうと涙目で牡丹肉の焦げを削ぎ落としている小傘。
はぁ、ほんと、しょうがないやつだな。

「小傘、俺がやっておくから晩飯の用意をしてくれ。それと、あとでお仕置きだからな」

「はうぅ……今日はどんな縛り方なのかしら、ポッ」

野菜汁の入った鍋と釜に入った飯を居間まで運ぶ小傘に苦笑しながら牡丹肉の焦げを削ぎ落とす。

最後にボソッと聞こえた言葉は聞こえなかった、俺は何も聞いていない、うん。

しかし、今日はいつもよりかなり豪勢な食事だ、何かあったのかね？

「「いただきます」」

手を合わせて食材に感謝。

うん、今日も元気だ汁がうまい。

小傘も片手を頬に添えて、ンまぁーーーーいッ！！　っと言っている。

何か顔が濃くなってるぞ小傘よ。

「ところで小傘、今日って何か特別な日だっけ？」

さっきから気になっていた事を訊いてみる事にした。

すると、さっきまでの濃い顔を元に戻して、少し怒ったような表情に変える。

え？　なに？　何か悪いこと言った？

「ふーん、旦那さんはわちきと出会った日なんて覚えてないんだぁ

？　悲しい、なぁ……グスッ」

「へ？　そ、そうだったか！？　すまん、ごめん、本当に申し訳ない！」

そんな大事な事を覚えていなかった俺は思わず土下座する。
今回は全面的に俺が悪い。
顔俯かせ、鼻を啜る小傘に凄まじい罪悪感を覚える。
しばらく、言い訳じみた言葉を繰り返しながら謝罪の意思を伝える俺に小傘は更に肩を震わせる。
ギギギ、さっきの自分を殴り飛ばしたい。
土下座した俺には沈黙が痛い、けど少し小傘の様子が変だ。

「……く……ふふ、あはは、冗談だよ旦那さん。でも、ちゃんと覚えておいて欲しかったな。旦那さんにとっては大したことじゃなかったのかもしれないけれど。旦那さんが私を拾って大事に使ってくれたのは凄く嬉しかったから」

耐え切れない様に笑い出した小傘は少しだけ寂しそうに告げる。
どちらにせよ、悪いのは俺だし、素直に謝ろう。
立ち上がり、正面にいる小傘に近づく。
できる限り優しく頭に手をおいて、サラサラとした感触の髪を撫でる。
小傘だけに言わせては男が廃るというもの、俺の思いも伝えねばなるまい。

「ごめんな、俺も、お前に会えて良かったよ。少しの間だったけど1週間旅した時に俺一人だったら死んでいたかもしれない。ほんと感謝してもしきれない。ありがとう、小傘」

「ううん、こっちこそ。拾ってくれてありがとう、旦那さん」

俺に寄りかかるように体を預け、気持ち良さそうに撫でられる小傘と気恥ずかしげな俺。

なんだか青春の１ページの様な甘酸っぱい雰囲気の中、夜は更けていく。

「あ、でもお仕置きはするからな」

「はうっ！？」

いつもの様に最後まで続かないシリアスなのであった。

俺と諏訪子と修行（後書き）

チョメチョメ（死語）だと思ったか！？緊縛だよ！
まぁ、どちらにせよエロちっくな響きなのは変わりない。
この後は各々の妄想で補完してください。

※アラジン神：絶対に許早苗。

※ンまぁーーーーいッ！！：某奇妙な物語より。

※ギギギ：悔しがる様の擬音語、らしい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5047z/

東方行者放浪伝

2011年12月18日06時49分発行